

【B年】聖霊降臨節第4主日(2023年6月18日)

【旧約聖書日課】申命記 8章11～20節

11わたしが今日命じる戒めと法と掟を守らず、あなたの神、主を忘れることのないように、注意しなさい。12あなたが食べて満足し、立派な家を立てて住み、13牛や羊が殖え、銀や金が増し、財産が豊かになって、14心おごり、あなたの神、主を忘れることのないようにしなさい。主はあなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出し、15炎の蛇とさそりのいる、水のない乾いた、広くて恐ろしい荒野を行かせ、硬い岩から水を湧き出させ、16あなたの先祖が味わったことのないマナを荒野で食べさせてくださった。それは、あなたを苦しめて試し、ついには幸福にするためであった。17あなたは、「自分の力と手の働きで、この富を築いた」などと考えるはならない。18むしろ、あなたの神、主を思い起こしなさい。富を築く力をあなたに与えられたのは主であり、主が先祖に誓われた契約を果たして、今日のようにしてくださったのである。

19もしあなたが、あなたの神、主を忘れて他の神々に従い、それに仕えて、ひれ伏すようなことがあれば、わたしは、今日、あなたたちに証言する。あなたたちは必ず滅びる。20主があなたたちの前から滅ぼされた国々と同じように、あなたたちも、あなたたちの神、主の御声に聞き従わないがゆえに、滅び去る。

【使徒書日課】使徒言行録 4章5～12節

5次の日、議員、長老、律法学者たちがエルサレムに集まった。6大祭司アンナスとカイアファとヨハネとアレクサンドロと大祭司一族が集まった。7そして、使徒たちを真ん中に立たせて、「お前たちは何の権威によって、だれの名によってああいふことをしたのか」と尋問した。8そのとき、ペトロは聖霊に満たされて言った。「民の議員、また長老の方々、9今日わたしたちが取り調べを受けているのは、病人に対する善い行いと、その人が何によっていやされたかということについてであるならば、10あなたがたもイスラエルの民全体も知っていただきたい。この人が良くなって、皆さんの前に立っているのは、あなたがたが十字架につけて殺し、神が死者の中から復活させられたあのナザレの人、イエス・キリストの名によるものです。11この方こそ、

『あなたがた家を建てる者に捨てられたが、

隅の親石となった石』

です。12ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです。』

【福音書日課】ルカによる福音書 8章40～20節

40イエスが帰って来られると、群衆は喜んで迎えた。人々は皆、イエスを待っていたからである。41そこへ、ヤイロという人が来た。この人は会堂長であった。彼はイエスの足もとにひれ伏して、自分の家に来てくださるようにと願った。42十二歳ぐらいの一人娘がいたが、死にかけていたのである。イエスがそこに行かれる途中、群衆が周りに押し寄せて来た。43ときに、十二年このかた出血が止まらず、医者に全財産を使い果たしたが、だれからも治してもらえない女がいた。44この女が近寄って来て、後ろからイエスの服の房に触れると、直ちに出血が止まった。45イエスは、「わたしに触れたのはだれか」と言われた。人々は皆、自分ではないと答えたので、ペトロが、「先生、群衆があなたを取り巻いて、押し合っているのです」と言った。46しかし、イエスは、「だれかがわたしに触れた。わたしから力が出て行ったのを感じたのだ」と言われた。47女は隠しきれないと知って、震えながら進み出てひれ伏し、触れた理由とたちまちいやされた次第とを皆の前で話した。48イエスは言われた。「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。」49イエスがまだ話しておられるときに、会堂長の家から人が来て言った。「お嬢さんは亡くなりました。この上、先生を煩わすことはありません。」50イエスは、これを聞いて会堂長に言われた。「恐れることはない。ただ信じなさい。そうすれば、娘は救われる。」51イエスはその家に着くと、ペトロ、ヨハネ、ヤコブ、それに娘の父母のほかには、だれも一緒に入ることをお許しにならなかった。52人々は皆、娘のために泣き悲しんでいた。そこで、イエスは言われた。「泣くな。死んだのではない。眠っているのだ。」53人々は、娘が死んだことを知っていたので、イエスをあざ笑った。54イエスは娘の手を取り、「娘よ、起きなさい」と呼びかけられた。55すると娘は、その霊が戻って、すぐに起き上がった。イエスは、娘に食べ物を与えるように指図をされた。56娘の両親は非常に驚いた。イエスは、この出来事をだれにも話さないようにお命じになった。

『聖書協会共同訳』（2018年版）読み比べ

申命記 8章11～20節

「あなたの神、主を忘れないようにあなたは注意し、今日あなたに命じる戒めと法と掟を守りなさい。¹²あなたが食べて満足し、立派な家を建てて住み、¹³牛や羊が増え、銀や金が増し、あなたのあらゆる持ち物が増えるとき、¹⁴心が驕り、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出されたあなたの神、主を忘れないようにしなさい。¹⁵この方は、炎の蛇とさそりのいる、水のない乾いた、広大で恐ろしい荒れ野を進ませ、あなたのために硬い岩から水を湧き出させ、¹⁶あなたの先祖も知らなかったマナを、荒れ野で食べさせてくださった。それは、あなたを苦しめ、試みても、最後には、あなたを幸せにするためであった。¹⁷あなたは自分の強さと手の力で、この富を生み出したと考えてはならない。¹⁸むしろ、あなたの神、主を思い起こしなさい。この方が、あなたに力を与えて富を生み出させ、先祖に誓われたその契約を実行し、今日のようにしてくださったのである。¹⁹もし、あなたの神、主を忘れるようなことがあって、他の神々に従い、これに仕え、これにひれ伏すなら、私は今日、あなたがたに証言する。あなたがたは必ず滅びる。²⁰主があなただがの前から滅ぼされた諸国民と同じように、あなたがたも滅びる。あなたがたの神、主の声に耳を傾けないからである。」

使徒言行録 4章5～12節

⁵翌日、議員、長老、律法学者たちがエルサレムに集まった。⁶大祭司アンナスとカイアファとヨハネとアレクサンドロと大祭司一族が集まった。⁷そして、使徒たちを真ん中に立たせて、「お前たちは何の権威によって、誰の名によってこんなことをしたのか」と尋問した。⁸その時、ペトロは聖霊に満たされて言った。「民の指導者たち、また長老の方々、⁹今日私たちが取り調べを受けているのは、病人に対する善い行いと、その人が何によって癒されたかということについてであるならば、¹⁰皆さんもイスラエルの民全体も知っていただきたい。この人が良くなって、あなたがたの前に立っているのは、あなたがたが十字架につけ、神が死者の中から復活させられたナザレの人イエス・キリストの名によるものです。¹¹この方こそ、

『あなたがた家を建てる者に捨てられ
隅の親石となった石』

です。¹²この人による以外に救いはありません。私たちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです。」

ルカによる福音書 8章40～56節

⁴⁰イエスが帰って来られると、群衆は喜んで迎えた。皆がイエスを待ちわびていたからである。⁴¹するとそこに、ヤイロと言う人が来た。この人は会堂長であった。彼はイエスの足元にひれ伏して、自分の家に来てくださるようにと願った。⁴²十二歳ぐらいの一人娘がいたが、死にかけていたのである。

イエスが行かれる途中、群衆が周りに押し寄せて来た。⁴³ここに、十二年この方、出血が止まらない女がいた。医者に全財産を使い果たしたが、誰にも治してもらえなかった。⁴⁴この女が後ろから近寄って、イエスの衣の裾に触れると、たちまち出血が止まった。⁴⁵イエスは、「私に触れたのは誰か」と言われた。皆自分ではないと言ったので、ペトロが、「先生、群衆が取り巻いて、ひしめき合っているのです」と言った。⁴⁶しかし、イエスは、「誰かが私に触れた。私から力が出て行ったのを感じたのだ」と言われた。⁴⁷女は隠しきれないと知って、震えながら進み出てひれ伏し、イエスに触れた理由とたちまち癒された次第とを、民全体の前で話した。⁴⁸イエスは言われた。「娘よ、あなたの信仰があなただを救った。安心して行きなさい。」

⁴⁹イエスがまだ話しておられるときに、会堂長の家から人が来て言った。「お嬢さんは亡くされました。この上、先生を煩わすことはありません。」⁵⁰イエスは、これを聞いて会堂長に言われた。「恐れることはない。ただ信じなさい。そうすれば、娘は救われる。」⁵¹家に着くと、ペトロ、ヨハネ、ヤコブ、それに子どもの父母のほかには、誰も一緒に入ることをお許しにならなかった。⁵²人々は皆、娘のために泣き悲しんでいた。イエスは言われた。「泣かなくともよい。娘は死んだのではない。眠っているのだ。」⁵³人々は、娘が死んだことを知っていたので、イエスを嘲笑った。⁵⁴イエスは娘の手を取って、「子よ、起きなさい」と呼びかけられた。⁵⁵すると、霊が戻って、娘はすぐに起き上がった。イエスは、何か食べ物を与えるように指図をされた。⁵⁶両親は非常に驚いた。イエスはこの出来事を誰にも話さないようにお命じになった。

黙想のためのノート

次主日の教会暦と聖書日課

・6月18日「聖霊降臨節第4主日」の日課主題は「キリストを信任する教会」。

・旧約聖書日課は、「申命記」から、律法授与の意義を教える部分の中から。使徒書日課は、「使徒言行録」から、ペトロとヨハネが大祭司のもとで取り調べを受け応答している箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、ヤイロの娘と長血を患う女を癒した逸話。

旧約日課(申命記8章より)

・「申命記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「律法」の第五巻、「出エジプト記」から始まる「モーセ物語」を完結させる文書。本書の大部は、モーセがエジプトから導き出した民にシナイ山で律法を授与し、約束の地に入るまでの四十年の荒れ野の旅を続けた後、自身の死期を悟り、これまでの歩みを振り返りつつ「律法」を再確認するという建付けで構成されている。日課箇所は、5章で「十戒」が提示されたのに続いて、「律法」が授与された意義を四十年の旅で経験した出来事を通して示す一連の教え(5～11章)の一部。

・この一連の教えでは、「思い起こしなさい」や「聞け、イスラエル」などの定型句が繰り返されたり、決まった教えが繰り返し現れるなど、「朗読を聞かせる」ことを前提とした文体で構成されている。「律法の朗読を聞かせる」という形式は、旧約中で繰り返し現れるもので、カナン地方に定住した民がシケムに集められて朗読を聞く場面(ヨシュア8章)、南王国末期にヨシヤ王が神殿で見つかった古い律法の書の朗読を聞く場面(王下22章)、バビロン捕囚後に再建工事が進められるエルサレムで書記官エズラが民を集めて律法を朗読した場面(ネヘミヤ8章)など、共同体的な営みとして描かれている。このように、正典「律法・預言者・諸書」を跨って一貫した「律法の朗読を聞かせる」というイメージが重要場面に埋め込まれていることから、これがバビロン捕囚後に正典編纂を伴って形成発展した「ユダヤ教共同体」の基礎を為す営みとして位置づけられていたことがわかる。

・11節「戒めと掟と法」は、それぞれヘブライ語の「ミツヴァー」「ミシュパト」「クッカー」の訳。正典「律法」において、「ミツヴァー」の訳語は「戒め」で安定しているが、「ミシュパト」は「掟」よりは「法」、また「権利」「裁き」「判決」なども訳される。「クッカー」は「法」より「掟」と訳される。訳語が安定しないのが翻訳底本の問題なのか、別の理由なのかは、わからない。

・19節で提示されるような「他の神々に従い」という状況は、元来、共同体を構成する個々人の信心の問題として問われているわけではない。「あなたたちは…滅び去る」(19節、21節)と繰り返されるように、ここで「律法」に基づく対象として想定されているのは、「共同体」としての「イスラエル」である。

使徒書日課(使徒言行録4章より)

・「使徒言行録」の全般の特徴については、前回までの資料を参照。

・日課箇所は、聖霊降臨後、まだ使徒らが皆エルサレムにとどまっている時期に、ペトロとヨハネが城内で経験した一連の出来事を伝える中(3～4章)の一場面。ペトロとヨハネが神殿に参詣した折に足の不自由な人を癒したことが発端となって、人々が騒ぎ出し、二人は人々の前で演説をすることになった(3章)。これを問題視した神殿当局者らが二人を逮捕投獄し、取り調べに引き出したのが、日課個所の場面。この後、二人は、神殿当局者らから警告を受けた上で釈放され、仲間のところに戻り、一連の出来事を報告するが、そこで起こった宣教への新たな決意は、「第二の聖霊降臨」として描かれていく(4:31)。この展開を「使徒言行録」の構成から見ると、2章から4章までが広い意味で「聖霊降臨の出来事」として位置づけられていることがわかる。

・ここに描かれるような大祭司の前での使徒たちの取り調べが実際に行われたのかどうかは、確かめようがない。しかし、この取り調べのやり取りには、初期教会が既存のユダヤ教社会の中で始めることになった独自の主張が反映されている。すなわち、「使徒言行録」著者の立場からは、初期教会がユダヤ教社会の中にあって「何の権威によって、だれの名によって」(7節)その独自の活動を展開し、集団(自分たちの新会堂)を拡大しようとしているのか、という問いを突き付けられ、それに応えようとしていた、と考えられているのである。ここで、「権威」と訳されている語は「デュナミス」であって、一般に「権威」と訳される「エクスーシア」ではない。主イエスの「権威」、また主イエスが弟子たちに付与される「権威/権能」は、また世俗の「権力」は、通常「エクスーシア」で表されている(ルカ4:32,36、5:24、7:8、9:1、10:19、12:11、19:17、20:2,8、20:20、23:7など)。一方、「デュナミス」は、「悪霊」も含めた霊的な力や神的な力を指して用いられる。「使徒言行録」において、「デュナミス」は、昇天前の主イエスが弟子たちに「聖霊降臨」を約束される際に、「聖霊降臨」によってもたらされるものとして示された「力」(1:8)であり、使徒の説教で、神がイエスを通して人々の間で行われた「奇跡」(2:22)として語られるものであり、事実彼らが「聖霊降臨」後に行い始めたことの原動力となっている「力」(3:12)である。日課箇所7節は、「福音書」において主イエスが人々の前で問われた場面と並行する出来事とするならば「デュナミス」ではなく「エクスーシア」で描かれるべきところであるが、「聖霊降臨」によって始まった使徒たちの教会のあり方を示唆するために、敢えて「デュナミス」を用いているのであろう。そして、この「デュナミス」を「聖霊降臨」によって信じる者たちにもたらす存在として、「ナザレの人、イエス・キリスト」の「名」が重要な位置を与えられるものとして提示されるのであろう。

福音書日課(ルカ8章より)

・日課箇所は、「ヤイロの娘と長血を患う女の癒し」の逸話として知られ、「共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)」が共通して伝えている。比較すると、「マルコ」と「ルカ」が概ね一致しているのに対して、「マタイ」は大幅に縮小した逸話としている。にもかかわらず、三福音書は、「ヤイロの娘の逸話」の間に「長血を患う女の逸話」を挟み込むという構造を保っており、この二つの逸話の結びつきを不可分のものとして理解していたことがわかる。

・二つの逸話は、いずれも「病気の癒し」という共通のテーマを扱っているが、「ヤイロの娘」の逸話が危篤状態⇨死からの回復であるのに対して、「長血の女」の逸話は慢性病からの回復である。この二つの逸話を、「共観福音書」は、根源的に同じ次元の出来事と理解しているのだろう。すなわち、「死者の蘇生・復活」も「社会的に弱者とされる慢性病の除去」も、どちらも「社会生活＝共同体への回復」という意味で同じ意味を持つ出来事と理解されるべきであるというのが、二つの逸話を不可分のものとして伝えることで示そうとしていることなのだと考えられる。そのための仕掛けとして、「マルコ」は、「長血の女」の病歴を12年と描くだけでなく、「ヤイロの娘」の年齢をも12歳とし、二つの逸話の同質性を強調していると考えられる。一方、この同質性を示すためだけであれば、細部の描写を省くことができると考えたのが、「マタイ」著者の判断なのだろう。

・「ルカ」は、この逸話集を「マルコ」と同様、「悪霊に取りつかれたゲラサ人の癒し」の逸話に続けて置いている。「マルコ」は、この二つの逸話箇所の後、「ナザレで拒まれる逸話」を挟んで「十二弟子を宣教派遣する」箇所に進めている。一方、「ルカ」は、「ナザレで拒まれる逸話」を置かず、すぐに「十二弟子を宣教派遣する」箇所に続けている。「ルカ」は、おそらく、二つの逸話箇所を、「十二弟子を宣教派遣する」ための重要な前提として位置づけようとしているのだろう。すなわち、「ルカ」は、十二弟子の宣教派遣の場面を、「あらゆる悪霊に打ち勝ち、病気を癒す力と権能をお授けになった」(9:1)という記述から始めており、「マタイ」や「マルコ」の並行する宣教派遣の場面と比べてとき、明らかに先行する逸話との明確な関連を意識させるように表現を選んでいる。つまり、「ゲラサ人の癒し」の逸話が「あらゆる悪霊に打ち勝つ」こと、「ヤイロの娘と長血を患う女の癒し」の逸話が「病気を癒す」ことに対応するように記述されている。また、「ルカ」はここに「力(デュナミス)と権能(エクスーシア)」という二重の言葉を用いているが、「マタイ」や「マルコ」は「権能(エクスーシア)」だけである。これは、「ルカ」が「長血の女を癒す」場面で描かれる主イエスから「力(デュナミス)が出て行った」という記述(「マルコ」にもある)を意識的に9:1に導入し、主イエスと弟子たちの働きの連続性を示そうとしたものと考えられるのである。

来週の誕生日(6月18日~24日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-16 番「われらの主こそは」(= I 15「我らのみかみは」)は、19世紀英国の文筆家 J.コンダーの詩集の中から讃美歌に採用された歌詞で、黙 19:6 に基づく。曲は、18世紀英国の長老派牧師レーエフ・ハリソンによる聖歌集に収められたものの一つ。
- ・21-446 番「主が手を取って起こせば」は、教団牧師・今駒泰成が「ともうたおう」(1976年発行)編纂に先立つ歌詞公募に応募した歌詞。今駒が盲人キリスト教伝道協議会の働きに従事する中で着想した。今駒の歌詞は、他に58番「み言葉をください」など。曲は、この歌詞のために、カトリック信徒の作曲家・新垣壬敏が作曲。新垣の曲は、他に5番「わたしたちは神の民」や81番「主の食卓を囲み」など。
- ・21-529 番「主よ、わが身を」(= I 333)は、19世紀スコットランド長老教会牧師ジョージ・マゼソンが「キリスト者の自由」と題して作詞発表したものだが、現代の英語讃美歌での採用は皆無。曲は19世紀英国の音楽家マーティンの作曲。

21-16 「われらの主こそは」

The Lord is King! Lift Up Thy Voice

1. The Lord is King! lift up thy voice, / O earth, and all ye heavens, rejoice; / from world to world the joy shall ring, / 'The Lord omnipotent is King!'
2. The Lord is King! who then shall dare / resist his will, distrust his care, / or murmur at his wise decrees, / or doubt his royal promises?
3. He reigns! ye saints, exalt your strains; / your God is King, your Father reigns; / and he is at the Father's side, / the Man of love, the Crucified.
4. Alike pervaded by his eye / all parts of his dominion lie: / this world of ours and worlds unseen, / and thin the boundary between!
5. One Lord one empire all secures; / he reigns, and life and death are yours; / through earth and heaven one song shall ring, / 'The Lord omnipotent is King!'

21-529 「主よ、わが身を」

Make Me a Captive, Lord

1. Make me a captive, Lord, / and then I shall be free. / Force me to render up my sword, / and I shall conqueror be. / I sink in life's alarms / when by myself I stand; / imprison me within thine arms, / and strong shall be my hand.
2. My heart is weak and poor / until it master find; / it has no spring of action sure, / it varies with the wind. / It cannot freely move / till thou hast wrought its chain; / enslave it with thy matchless love, / and deathless it shall reign.
3. My power is faint and low / till I have learned to serve; / it lacks the needed fire to glow, / it lacks the breeze to nerve. / It cannot drive the world / until itself be driven; / its flag can only be unfurled / when thou shalt breathe from heaven.
4. My will is not my own / till thou hast made it thine; / if it would reach a monarch's throne, / it must its crown resign. / It only stands unbent / amid the clashing strife, / when on thy bosom it has leant, / and found in thee its life.